

# 「こんな」 しています。

## わだいのついで

### 霞ヶ関で

東京メトロから丸の内や霞ヶ関の街路に出ると、「おおっ」という気になります。世界市場に向かって居並ぶビル群と政策立案の本拠地。日本の国家を背負った本丸です。私はこの都心からずっと遠い熊野の地に頻繁に出掛け、地元の方々たちと生活手段を生み出すための社会実験を繰り返しています。もちろん国の助成は競争的資金といつて誰でも応募できるのですが、大半を占める中小企業には研究開発する設備も資金も足りずその土俵に上がる

議の参加者と最近の食品製造の動向を話しました。

農業を含む食品産業界では新規な技術開発や商品開発に盛んにチャレンジしています。同じ委員の方は北海道からの専門家でしたが、北海道の食品製造企業は97、98%が中小企業にもかかわらず、国の助成を受け取り組む農業や食品に関する技術開発は残りの2、3%の大手企業に偏っているというのです。もちろん国の助成は競争的資金といつて誰でも応募できるのですが、大半を占める中小企業には研究開発する設備も資金も足りずその土俵に上がる

# 別のはなし



小水力発電に取り組む地域の若者と住民

ことはできません。日本人が日々食べる食糧に関する産業生産額は約78兆円。一方、農業生産額は8兆円。約1割です。残りの9割は加工や流通、外食などサービスからの産出額。また最新データでは、農林水産物の輸入額は9兆円となり国内の農業産出額を追い越してしまいました。いまから半世紀前には国民の食料費の半分以上は国内

の農業生産物に直接頼っていました。それが、現在の食生活では国産の生鮮品ではなく、内外の素材を工場加工してトルトや冷凍食品、総菜や外食に大きく依存することになり、それは食品工業の大きな成長を促しました。「工業」ですからターゲットは全日本であり世界となります。農業生産でもIT化や海外展開で成功事例が出ています。農業でも工業でも大手が成長し、霧細がついていけない世界になっていきます。では、こぼれた地域の生産者はどこに向かうのでしょうか。手作りの地産地消に活路を見いだすのでしょうか？

### 暮らしの問題

今や巨大となった食品工業、一方の食農問題を含めた地産地消。この双方に共通するキーワードとして「地域資源」があるため話が混乱しますが、これは別の話だと考えます。食品の機能性技術開発で地域は「あまねく」元気になるし、地産地消で農家は大金持ちにもならないでしょう。また、私たちがコツコツと熊野の地で発電実験を繰り返している小水力発電と超大規模メガ発電も別の話なのです。小さな発電所はがんばっても大量の電気は作れないのですから。つまり、地産地消や小水力発電が向かうところは、「経済」ではなく「生活」の問題なのです。こだわるのは大都市や巨大市場というモンスターではなく、生活の周辺である地域。では、生活視点の経済はダイナミ

ックさに欠け、国力を衰退させるのでしょうか。いや、芯がずしりと詰まった地域の強さを得るために、まずは生活の改革に目を向けること。地域活性という、空の彼方の漠然とした夢を追い掛けるのではなく、足下の生活を取り戻すこと。そこから着実な経済に裏付けられた地域の暮らしを実現すること。モンスターに向かう日本の先端工業と地産地消がその時に初めて、「元氣な農業・農村」を足場として「つながる」のではないのでしょうか。



本欄コラムをまとめた『続地産地消大学』を発刊しました

## プロフィール



湯崎真梨子(ゆざき まりこ)  
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授  
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。